

学校を離脱した子どもへの支援

「田川ふれ愛義塾」におけるエンパワメントアプローチの試み

松下一世

要約

本稿は、更生保護施設の質的調査を行い、元非行少年5人の語りをもとに、社会的自立に必要なリテラシーと、支援の在り方について考察したものである。彼らの語りは、不安定な家族と貧困の生活から非行に走るまでの過程と、自己回復を果たすまでのライフヒストリーである。考察から得られた知見は、リテラシーは複数の要素が相互関係の中で機能するものであること、これらのリテラシーは、エンパワメントアプローチによる支援によって有効に機能することである。

1 問題の所在

学校現場では、「学力向上」の名の下、学力テストのランキングを上げる競争が全国的に激化している。一方、学力テストの対象にすらない子どもがいる。早期に学校を離脱してしまう子どもの存在である。

そこで、本研究では、不登校や中退によって学校を離脱した子どもの実態をリテラシーの概念に着目して調査する。まず、学校を離脱した状況を明らかにし、次に、さまざまな福祉・更生施設を経て獲得した、社会的自立のために必要なリテラシーの要素を抽出し、その構造を明らかにする。そして、どのようなアプローチの支援が有効であったかを考察する。こうして得られた知見は、学校等の公的機関の在り方、困難を抱える子どもに対する支援の在り方を示唆するであろう。

調査対象者は、福岡県にあるNPO法人田川ふれ愛義塾という更生保護施設（以下、「義塾」と略す）に入所している5人の元非行少年である。これまでの研究では、支援する側、教育する側から、子どもの成長や変容が語られることが多い。本稿では、当事者である元非行少年た

ちの語りを軸に、支援する側の語りと併せて分析し、支援の有効性を探るものである。

2 調査方法と対象

「リテラシー」の概念は、1960年代以降、ユネスコにおいて単純識字から機能的識字に移行した。岩槻（2006）は、機能的識字の中でも、パウロ・フレイレの「批判的リテラシー」の新しい系譜として、家族や地域社会、職場や宗教組織等の学校外の社会集団で使用される多様なリテラシーのひとつとしてバートンの「ローカルリテラシー」という考え方に注目する。本調査においても、日常生活に埋め込まれたローカルリテラシーの実態を把握していくために、学力テストで彼らの能力を一律に測定するのではなく、エスノグラフィーおよびインタビューを行った。

義塾には、16～20歳の元非行少年たちが、常時15人程度入所している。青少年の受け入れをしている施設は全国的にも少ない。彼らは、少年院の後に義塾に来たケースもあれば、少年院に行く一歩手前で義塾が引き受けているケースもあり、その入所事情は多様であるが、そのほ

とんどが義務教育段階で学校から中途離脱している。

筆者らは、2011年から2012年にかけて合計10回、義塾を訪れ、作業をともに行ったりしながら塾生の観察を行った。

インタビュー対象の5人は、義塾での生活において、ほぼ自立した生活を営めるようになっており、「卒業間際」の人達である。次の表は、対象者のプロフィールである。

	年齢	性別	入所の経緯	現在
ユウキ	16歳	男	保護観察所から	通信制高校 飲食店でバイト
ケンスケ	20歳	男	児童養護施設、 二度の少年院、 保護観察所から 高校中退	建設業でバイト 車の免許
タカシ	18歳	男	児童養護施設、 児童自立支援施設、 少年院、保護 観察所から	高校卒業認定資格、 車の免許、危険物取扱資格他 ガソリンスタンドでバイト
ヒロキ	16歳	男	保護観察処分、 親からの相談	通信制高校 飲食店でバイト
マイ	18歳	女	二度の少年院、 保護観察所から	高校卒業認定資格 受験中 スーパーでバイト

インタビューは、ひとり一時間程度の半構造化インタビューである。なお、彼らと関わる4名のスタッフおよび義塾の理事長のインタビューも加味する。なお、塾生と、理事長（工藤さん）以外のスタッフの名前はすべて仮名である。

3 学校を離脱した状況 — 「逃げ」と「遊び」の生活

岩田（2008）は、非行少年の家族分析を通して、「家族が壊れている家庭の子どもたちは教育過程の不利だけにとどまらずその後の進路においても『どこにもつながっていない』ことからくる不安定さによって、彼らの人生が一気に

落ちてしまう可能性」を指摘している。

以下、5人の不安定さを見ていきたい。

現在16歳のユウキは、中3のときの犯罪行為により保護観察処分となったが、生活が落ち着かず、職業訓練校の先生に紹介されて義塾に来た。

ユウキが語る生育歴は、以下である。

ユウキ：その、おれ、もう親父が違ったんですよ。そっから違う親父とオカンが結婚して、で、一緒おとって、小学校4年生くらいで一回離婚して、〇〇（地名）の方にいったんですよ。そっから、また再婚して、その今の、そんときの親父と。弟とかもおったんで。そっからまたずっと、〇〇（地名）っていうところに住んでますね。

*：ちょっと待ってよ、ついていけなかったんだけど（笑）。小4で離婚したのは、また違うお父さん？違うお父さんっていうのは変だけど、ユウキくんを産んだ…

ユウキ：5歳くらいのときに、血つながってない親父とオカンが結婚して、小学校4年生までずっと一緒やったんですよ。で、小学校4年生に別れて、小学校5年生の夏休みにまた同じ…その離婚した親父と再婚したんですよ。で、それで今もずっとおるすね。

ユウキには、物心着いた時から父親がいない。5歳の頃に母親が再婚するが小4の時に離婚、そして同じ相手と一年後の小5に再婚した。義父とユウキとの関係は、あまりうまくいかなかった。母については、あまり語られていない。ユウキが学校に行かなくなり、問題行動を起こすようになるのは、中学校に入ってからだ。学校にも行かなくなり、家出を繰り返し、バイク仲間と遊び、犯罪に走ってしまう。義父との関

係はますます悪化する。

*：(家に) 帰らなかったの？

ユウキ：あんま帰りようなかったですね。

ずっと遊びほうけて、で、ヒマになったら家
帰ってとか。たまに着替えに帰ってとか。

*：それはどれくらいのときから？

ユウキ：中2くらい。中1んときに一回家出
したんですよ。いとこん家。家出みたいな
感じ。

*：小学校の頃はお義父さんともよくしゃ
べったりした？

ユウキ：そうっすね。でも、小学校のときは
小学校のときで、親父がちょっとうるさ
かったんですよ。すぐ怒ってきたりとか。
中学校になってからあんまり怒ってこんやっ
たけど、おれがひちゃかちゃしだして、親
父がまたキレだしたけど、それでもおれき
かんよったき、もう親父が知らんこいつ、
みたいになって。で俺も、は？お前に知ら
れても意味ないやろみたいな。

次に、ケンスケは、母子家庭であり、経済事
情から、合格していた私立の学校の入学を諦め
る。スタッフの話によると、小学校のときに離
婚して母子家庭。経済的にも厳しかったという。

ケンスケは、中学校の時に養護施設に行く。
その後バイトをしながら公立高校に行くが、す
ぐ中退。その後、少年院に二度行くこととなる。

ケンスケ：15の時から基本的には、トビして
たんですよ。

*：中学校は卒業してたってことですか？

ケンスケ：はい。中学校卒業して、一回公立
高校行ったんですけど。ま、すぐ中退して。

*：高校行ってたんですか？

ケンスケ：はい。すぐ中退して、住み込みで

仕事して。トビの仕事して。そこからまた
一回目の少年院入って。一回目の少年院出
て、夜の仕事して。少年院入って、ここに
来て、さっき行ってた建設業行って。自分
そんな時中学校は養護施設にいたんで。まあ
高校の学費と、月お小遣い4000円とか出る
んですけど。食費とか無料ですし、寮費と
かなんもかからないんですけど、それでも
やっぱ気持ちの面で結構厳しいですね。バ
イトしたくて。自分〇〇(地名)ていうと
ころ、温泉が有名だったんで、温泉、まあ
旅館があって、そこでバイトしてたんです
よ。時給680円くらいで。

*：それで何時になります？

ケンスケ：それでだいたい12時。帰ってくる
のがもう12時半くらい。チャリでダッシュ
で帰って12時半。寝るのが1時くらい。朝
寝坊して、4時間目くらいから行って。停
学なんか知るか、みたいな。

ケンスケは、一人で生きて行くために15歳か
らトビの仕事や温泉旅館で働いた。高校を中退
したのも、深夜まで働かざるを得ない経済的な
問題からのようだ。

なぜ犯罪に走ったかには触れていないが、母
親との関係が良好でなかったことは次の語りか
ら読み取れる。

ばく少年院いまして、んで、その少年院、2
回目だったんですけど、1回目の少年院出た
時にやっぱりもう、親が次あんたが行ったら
知らんけんねみたいな。でも別に自分も。は
い、それは重々承知でもう2回目の少年院
入って。で、まあ別に親とはもう手紙とかは
しょっちゅうしてて。面会とかも来てたんで
すけど。あんまり地元には帰したくないみた
いな感じで。親が結局引き取る姿勢がなくて。

それで、まあこういう少年院出た後に、引き受け先ってあるじゃないですか?引き受け先を、数を、一番施設数の多い〇〇（地名）を探して、その時ここに。

次のタカシは、中学から施設や少年院という生活を送る。きっかけは、家出してお金に困り、犯罪行為に走った。タカシは仲間と遊ぶというより、ほとんど単独だ。

*：もし、差支えなかったら少年院に入ったきっかけは。

タカシ：まあ、〇〇と〇〇（罪名）です。

*：なんか自分の中で、むしゃくしゃしてたとか、誘われたとか、あるのかな。

タカシ：いや、そういうのではなく、ただ単に逃げてたから。

*：逃げてた?何から?

タカシ：やなことから。

タカシの言う「やなこと」というのは、父と姉からの暴力だと言う。タカシは、母のいない3人家族だ。小学校高学年から、父親のしつけに従わないと、暴力を受けていた。タカシは、小学校の時から自分が家族にどのように扱われていたかを私たちの前でかなり詳細に淡々と語った。

*：（お父さんは）暴力ふるった?

タカシ：はい……姉ちゃんからも暴力受けてました。

*：小学校のときからあったの?

タカシ：小5くらいかな。

*：中2の養護施設に行くようになったのは、また違うきっかけ?

タカシ：中学になってから10回くらい家出をしてるんですよ。

タカシは、小学校高学年から家出を始め、その後、全国あちこちに1人で放浪している。中2から児童養護施設、中3で児童自立支援施設に移る。そこで脱走し、犯罪を犯し、少年院に行く。

虐待があったから施設での保護措置だったかもしれないが、本人は、そのようには理解していない。

*：（児童相談所の人は）親の虐待についてはあまり知らない?

タカシ：たぶん知らないと思います。

*：親から虐待されている場合は、施設で守ってもらう権利があるから。きっとそのときは相談にのってくれるおとながいなかったんやね。中学の先生は?

タカシ：おれが正直に言ってなかったから、知らなかったと思いますよ。

*：誰にも助けを求めたことはなかった?

タカシ：いや、小学校の先生に助けを求めたりしました。

*：先生は、味方になってくれた?

タカシ：いや、親を呼んで、一緒に話して終わりです。

*：呼んで話して解決するような問題じゃないのにね。

タカシ：ないですね。

*：殴られたときにアザができたら学校の先生にわかるでしょ。

タカシ：気づいてましたよ。小6のとき、アザできて、家の付近の店で坐ってたら、近所の人に警察に通報されて、学校の先生にもアザ見られて、親を呼んで、またそれも話し合いで終わったですけど。

*：学校の先生が親にこんなことをしないでください、って言うの?

タカシ：終わったら、ぶん殴られてました。

その時以来、タカシは固く口を閉ざしていったのだろう。父に対する怒りは、おとな全般への不信感となっていったと思われる。

次に、ヒロキは、少年院には行ってないが、中3以降、保護観察処分になり、母親の相談から、義塾に来た子である。きっかけについて、本人は、次のように語る。

ヒロキ：入ったきっかけですか？その、あれっすね。家の、その、自分が暴れよったんですよ。家で。それで、親が連絡して、きたっすね。

＊＊：そのとき、今から考えると、なんで暴れたとかっていうふうに（考えてる？）

ヒロキ：それは、働きもせずに、学校もいかに、遊びたいだけ遊びよって。そしたら金なくなるじゃないですか。それで、親に金やれ、みたいな。それで暴れよったっすね。

それまでは小学校から野球少年で、中学校でも野球部で活躍し、私立高校にも合格していたが中退。なぜ突然、卒業を目前に遊ぶようになったのかについては、本人は「ただ部活が暇になったから」と言うが、時期を同じく両親が離婚、その後まもなく父親が病死している。

＊＊：あの、ちょっと、家は経済的には苦しかったとか、苦しくなかったとかある？

ヒロキ：苦しかったっすね、普通に。

＊＊：小さい頃から？

ヒロキ：小さい頃はそげんなかったんすど、親が離婚したんですよ。

＊：何年生のとき？

ヒロキ：中3っすね。中3の夏にお父さんが出ていって、高1の時に亡くなったんっすよ。

＊＊：どういうふうに亡くなったの？

ヒロキ：その、やっぱり身体が弱かったんっ

すよ。ここら辺の（胸をなでる）

＊：病気で亡くなったの？

ヒロキ：はい。血が噴き出すみたいなの。

＊＊：なるほどね。そのとき、離婚するって知ったときはどういう気持ちだった？

ヒロキ：もうとにかくイライラしたっすね。

離婚届の紙、ちょうど見たんっすよ。隠しちゃうとき。それで、イライラしたっす。

＊：お父さんのことは、好きだった？

ヒロキ：はい。よう会いに行きよったっすね。入院したときも、行きよったっす。

＊：そっか、そしたらショックやんね。

ヒロキ：はい。

＊：でもなんか、中3の三学期くらいから高1にかけて学校行かなくなったって言ったから、やっぱりお父さんのことっていうのは気持ちのなかでつながっているのかな？

ヒロキ：いや、それは

＊：やる気をなくしたとか。

ヒロキ：いや、それはないっすね。

＊：それは関係ない？自分のなかでは関係ない？

ヒロキ：はい。

次に、マイは、義塾では数少ない女子の1人である。少年院を出所して、義塾に来た。少年院には2回行っている。マイは、小学校から自分が「悪さばかり」していたと語る。

＊：小学校のときから悪さしてた。

マイ：いや、とりあえず、遊びに行くお金、ちょっと親の財布からちょっと取って遊びに（笑）

＊：小学校何年ぐらいから？

マイ：もうふつうに低学年とかから。遊びに行くお金（笑）

＊：何？ゲーセンとか行ってたの？

マイ：えっと、小4、5、6ぐらいからは、
○○とか○○とか（地名）に遊びに行きま
すね。

そのことで、父親から手をあげて怒られてい
る。でも、それは自分が悪いからで、「虐待」
ではないと、親を弁護する。

マイ：自分の家、けっこう勘違いされるん
ですよ。自分家、虐待じゃないのに、親
がすぐ手あげるつうか、口が少ないけん、
その分、手あげる親って多いじゃないです
か。けど、自分、昔からそれで育つとし、
しかも親が離婚するんですよ、5歳のときに。

*：5歳ね。

マイ：5歳のときに離婚しとるけん、なんか
勘違いされるんですけど、でも今実際仲い
いでもんね、自分。けっこうお父さんだ
けは、一番信頼してますもんね。

*：今まではあげられたこともあった？

マイ：そうです。その手をあげる度合いがた
ぶん、激しかったけんやと思いますよ。し
かも自分もけっこう、負けず嫌いやけん、
言い返したりするんですよ。だから、それ
に無性に腹たつもんね（笑）。言われまし
たもん、自分、打たれ強いって、親から。（笑）

*：へー、お父さんは大好きなん？

マイ：うん。はい。

*：ずっと？

マイ：自分、お父さんの趣味といっしょなん
ですよ。お父さん打楽器好きなんですよ。で、
ドラムもしよったんですよ、昔。ギターも
しとったんですよ。自分もしてましたも
んね。親の借りて、勝手に。全然ダメです
けど（笑）カッコいいんですよ、まじで。

義塾に来たのも父親が理事長の講演会に行っ

て勧めてくれたからだと言ひ、理事長は父親に
似ているとも語る。

そんな大好きな父親だが、5歳の時に母親と
離婚。母親が出ていく。父は、マイが小4の時
に再婚する。マイが遊び始めたときと、時期的
に符合する。

*：（笑）じゃあ再婚するって聞いたとき、
すごく嫌だった？

マイ：……いや、あ、どうでもよかった、ど
うでもよかったつったら、あれやけど。あ
れですね、お母さんができることのほうが、
なんか意外やったですね。

*：あー意外。

マイ：（家に）おらんかったけん、ずっと。
あんまり親といっしょにおることなかった
んですよ。

*：結婚するって。どんな気持ちだった？

マイ：あれえ？みたいな。

**：（笑）前もって会ってたりしてたの？
その、

マイ：いや、会ったことあるんですよ。前、っ
てか、お父さん、その前にも女おったん
ですよ。お父さん、まだ若かったんですよ。
29か28ぐらいやったんですよ、自分がその
とき。あ、お父さんが。に、めっちゃ10代っ
ぽい人と付き合っとして。かわいいんです
よ、しかもその子が。お父さん、カッコい
いけんか、わからんけど。意外とカッコい
いんですよ、お父さん（笑）もてるん
ですよ。それで。そしたら、別れとって。

マイは、この後、中2のときに児童自立支援
施設に行く話が出るが、離別した実の母親が
マイを引き取ることになる。しかし、実母ともう
まくいかなかった。

マイ：ママと、5歳のときに別れて10年後にまたいっしょに住んでる形で、なんか、5歳児扱いされるのが好かんかったんですよ、ほんとに。

＊：ああー

マイ：遊びに行こうとしたら、危ないとか言い出すんですよ。でも、今まで自分で、一人でぶらぶら危ないところ歩きよったのに何なん？ってなって、会わんくなって、けんかばっかしよったんですよ、ママと。それで、なんかもう嫌になって帰らなかったです。

その後すぐ、母方の親戚に預けられる。しかし、そこでもうまくいかず、父の元に戻る事となる。その5ヶ月後に少年院に入り、中3で2度目の少年院生活を送る。ほとんど自宅には戻らないまま、現在の義塾に来たということになる。

このように、5人の状況は様々であるが、不安定な家庭状況に陥り、貧困や虐待などの様々な困難を抱える彼らにとって、そこから「逃げ」るために「遊び」始める。最初は、親や周囲のおとなにわかってほしいというサインであったかもしれないが、「遊び」は非行となり、さらに繰り返すことによって、家族関係はますます悪化してしまう。

彼らは、自身の非行の原因を家族のせいになっているわけでは決していない。ヒロキは、尋ねるときっぱり否定した。タカシも被虐待という認識はなく、ただ「逃げ」だと語り、マイは、父の行為を「虐待ではない」と言い切った。

しかし、彼らの語りから浮かび上がる家族の姿は、「頼れない存在」であり、彼らは、ロールモデルを欠落したまま、自己の将来像を見失っていく。

4 リテラシー獲得のプロセス

彼らにとって、学校は、どんな意味を持っていたのだろうか。学校のことを尋ねても、彼らの語りから、先生や友人の話が出ることは少ない。良い思い出もなく、恨んでいたわけでもない。ただ、学校に行かなくなる。その時期は、中学校がほとんどだ。彼らは、家庭だけでなく学校からも「逃げ」、「遊び」に走る。学校は、彼らの非行に対して、ほとんどなんら手を打つことができず、学校に取り込むこともできず、彼らの身は、警察や児童相談所や家庭裁判所を介して、次の施設にゆだねられた。

彼らは、学校教育によって保障されるべき学力を獲得することができないまま、卒業した。彼らが勉強する機会を得るのは、少年院か、義塾に来てからである。

ユウキは、中2までは学校に登校したが、授業はほとんど受けず中3からは学校にも行かなくなる。勉強はほとんどわからなく成績も悪く、そんな生活の中で高校受験も考えたことはなかったと語る。義塾に来る少し前に、ユウキは職業訓練に行くも、あまり長くは続かなかったのは、そこでの勉強についていけなかったことが原因のようだ。しかし、義塾に来てから、通信制高校に行き始め、「遊び」の生活から一転、まじめに毎日働く生活スタイルへと切り替えている。見事な変貌と言うほかはない。通信制高校にも入学し、勉強を始めた。今は、週一回学校に通い、その課題レポートをこなしながら、正社員になることを目標にバイトの仕事には励んでいる。

＊：高校にまた行き出したのはなんで？10月に受けたきっかけとか。

ユウキ：いやー、それはまあ、やっぱりないよりある方がいいやないですか。高卒とか。

*：はいはい。

ユウキ：やし、やっぱ、なんもせんよりマシやないっすか。やけー、ここ（義塾）おっとして、ずっと、ただバイトだけっていうのも、あれやけー、なんもせんよりかはした方がいいかんと思って。

*：誰かに進められた？高校進学。

ユウキ：いや、別に進められてはないっすね。

*：聞いたりした？高校いってる子たちに。

ユウキ：聞いてもないっすね。

*：当面、いまの目標ってある？

ユウキ：今の目標っすか？

*：これだけお金貯めたいとか。

ユウキ：まあ、とりあえず自分でやっていきたいっすね。

*：生活を…？

ユウキ：これから。またここ卒業したとしても。前みたいに遊びほうけるんじゃないって。

*：うんうん。ここにきてさ、義塾で良かったって思えることある？

ユウキ：だいぶあるっすね。やっぱ自分が変わったっていうのも自覚しとるし。最初とか早う出たらいいやとかやったけど、今から、これからどうするかとかも、なんか自分で考えるようになったなと思うし、やっぱ。自分で変われたっていう自覚もてるっすね、やっぱ。

ケンスケは、入学はしなかったものの私立中学校に合格していたということから、基礎学力はあったと思われるが、その後、中学校ではやはり遅刻や欠席が増え、ほとんど授業を受けなくなる。高校もすぐやめてしまうため、勉強したのは、その後少年院のわずかな期間である。義塾に来てからも、ずっとトビの仕事(建築業)をしているという。今は、自動車学校で免許をとる勉強をしている。心境の変化について尋ね

てみた。

*：何が変わったっていう風に思われます？一番。

ケンスケ：なんか改めて言われると難しいですね。どうなんすかね。まだ、後々になったらたぶん変わったんかなって客観的に自分を見れる、今の自分なんで、ちょっと難しいです。

*：よかったなっていうことでもいいですけど。

ケンスケ：よかった…ま、やっぱ仕事と遊び、ちゃんと、なんて言うんですかね、区別つけられるようになったとかはありますね。若いころって、地元だったら友だちも常にすぐ、バイクでちょっと行けばいる距離じゃないですか。だから仕事終わったら遊び行って、夜中帰って、次の日寝坊して、たたき起こされて、行かなんとか、もう寝ぼけたまま仕事して。遅いって怒られて、の繰り返しだったんで。悪循環だったんですけど。こっち来て、まあ基本ずーっと仕事、もう寝るか仕事ってずーっとして、で、たまに2ヶ月に一回とか3ヶ月に1回地元帰った時にちょろっと遊んだりして。そういう意味ではメリハリというか。

義塾での生活は自分を律しなければならないので、その点は他の施設以上に厳しい面もあると語る。

ケンスケ：まあ少年院よりはキツイです。

*：少年院よりキツイ？

ケンスケ：キツイってまあ何がキツイって言うことやっぱ、少年院って塀に囲まれてるから、ある意味自分の中で欲に対するあきらめってあるんですよ。だっておいしいもの食べたいと思っても、食べれるわけじゃな

いじゃないですか。例えばフライドチキンが食べたいと思っても、ここだったらコンビニ行けばすぐ買えますけど。まあだいたいはなんか自分の、自分を制限する、少年院は制限される。ここ、やっぱ自分でせや、みたいな。そういう点キツイかなっていう。それはたぶん普通の人は普通にできてることなんでしょうけど。こっちの方が自分との闘いっていう意味でキツイかな、と思います。こんなこと人の前で言ったら恥ずかしいですけど。他の塾生の前では言えないですよ。(笑)

タカシは、家族からの暴力から逃げていたため、小学校高学年から学校にも登校していないが、養護施設、児童養護施設当時は学校での授業を受け、少年院でも勉学に励んだのか、多くの資格を取得している。

*：少年院でよかったことは、あんまりないですか。

タカシ：いろいろ資格がとれたことです。

*：どんな資格がとれたの？

タカシ：漢検と。

*：漢検は何級？

タカシ：漢検二級です。

*：二級は、むっちゃ難しいよ。

タカシ：いや、楽勝です。

*：すごい。知り合いが準二級の試験を一緒にしてたけど、むっちゃ難しかったです。すごいですね。ほかにある？

タカシ：あと、ワープロ。三級。

その後、タカシは高校卒業認定試験に合格し、養塾に来てから危険物取締資格や車の免許も得た。今は、整備士の資格取得に挑戦している。車が好きなのでガソリンスタンドの仕事をしな

がら、めざしている。

ヒロキは、中学校での授業はほぼ受けている。だが、勉強は苦手だと言う。私立の高校をやめた後は、義塾に来てから近くの通信制高校に編入している。アルバイトをしながら、勉強している。

*：高校の通信っていうのは、どの程度忙しいっていうか、勉強時間あるの？

ヒロキ：レポートとかもあるきー、そこまでとりよらんっすね。勉強の時間は。

**：1週間分の勉強を自分でしなさいってことなんだよね？通信制って。

ヒロキ：日にちが決まっちゃうんっすよ。出す。それまでに、しとって、みたいな。

*：結構、じゃあ忙しくない？

ヒロキ：まあ、たまったら忙しいっす。

**：一番何の教科が苦手？

ヒロキ：一番っすか？苦手なのは、やっぱり全部っすね。

*：わからんとき、どうしてる？レポート。

ヒロキ：塾生の人に聞きよーっす。

将来についてはまだ考える歳でもないが、母親への借金を返したいと語るヒロキである。

ヒロキ：はい。将来の事はまだわからんっす。

*：家帰ってからどうしようかっていうのは、ある程度は？

ヒロキ：もう、はい。仕事して、ちゃんとお金も返していこうって思うっすね。

*：返していくっていうのは、お母さんに？

ヒロキ：はい。私立高校に行きよったときに、結構金かかるんっすよ。私立やきー。

マイもまた中学校はほとんど行っていない。だが、マイの部屋には、本が多くあった。参考

書や、ケータイ小説など、図書館から借りているものもあり、少年院で本を読むのが好きになったと言う。

＊＊：本は、いつぐらいから好きなの？

マイ：えっ？自分、本、本好かんかったんですよ。けど、少年院に入るようになって、中学校のとき。本しかないやないですか。それで本読んどったら、本が好きになったみたいな。

また、数学も得意だと語り、高校卒業認定試験も受験中であった。

＊：高卒認定？

マイ：受けました。

＊＊：（数学は）受けて、通ったの？

マイ：普通に簡単でしたよ。

＊＊：いつ？

マイ：少年院に入っとうときに受けたんですよ。

＊：あっ少年院でねえ。

＊＊：普通に簡単だったんだ（笑）？

マイ：うん。

＊＊：それは、どこで勉強したの？

マイ：少年院で自分で勉強しました。

＊＊：へー。自分で、

＊：すごいね。

マイにとっても、少年院での体験が大きい。マイは、まだ将来の進路がみつけないが、毎日、バイトに行きながら将来自立できるように励んでいる。

5 義塾における仲間やスタッフの存在

彼らの意識の変容を見るときに、義塾におけ

る仲間やスタッフ、とりわけ理事長の工藤の存在がいかに大きいかを読み取れる。

ユウキ：面接があるんやけど、みたいな。元

暴走族の総長って言われて、で、まじ、めんどくせーとか思いよって、で出てきて、はよ一終らんやろうかみたいな感じやったんすよ。でもやっぱ今は違うっすね。絶対あれしろ、これしろとか言っこないやないっすか。自分の考えもとったら、それ言ったら分かってくれるやないですか、工藤さんやったら。やっぱ親とかやったら、どうせ続かんやろとか言って、頭ごなしにそう言われるやないですか、工藤さんとかやったら、こうしたいんですけどねーみたいに言ったら、あー、じゃあそうするように言っちゃんし、失敗したらもう一回やり直したらいいやないかみたいな感じで言われるきー。挑戦させてくれるんですよ。

＊：はいはいはい。今まではそんなことあんまりなかった？周りのおとなとか。

ユウキ：そうっすね。周りのおとなっつか、おとな自体があんまり好きやなかったんで。ただうるせーだけみたいな感じやったんで（笑）。

ケンスケの変化にも理事長の存在が大きい。憧れの存在でもあるようだ。

ケンスケ：工藤さんにしても、その他のスタッフにしてもずっとまじめに生きてきた人たちじゃないじゃないですか。だからこそ自分たちの心境をわかってくれたりとか。自分たちの立場で言ってくれるし。甘えちゃいかんとかは甘えちゃいかんって言ってくれるし。工藤さんも例えば人脈作りのために自分たちいい就職先、面倒見よ

うと思えばみてくれると思うんですけど。
そういうのは絶対にしないというか。出来るなら自分で仕事探して自分でしろとか。なんて言うんですかね。自分たちが求めているものっていうのは自分たちがすべきこととか、わかって言ってくれてると思うんですよ。自分たちの立場になって。その点が違うかなと思うんですけどね。学校とかの先生たちは優しい先生は甘やかす先生だったり、高校の時オレの先生は毎日マック連れてってくれてたんですけど。うるさく言う先生は何も知らんくせにわーわーわーわー言ったり。そこの違いとは思うんですけどね。

*：ご本人の体験自体をいろいろ聞いたら。全然違いますね。

ケンスケ：男として憧れもありますけどね。ヤンキーしとったらやくざに落ちるのも簡単じゃないですか。簡単になれるんですよ。全然。自分だってスカウトとか来たことがありますし。でもそれでやっぱりチンピラをカッコいいと思わない。むしろ工藤さんみたいな生き方の方がカッコいいと思うし。マイナスから這い上がる。ゼロから食べるのよりそっちの方が大変と思うんですよ。そこはやっぱり根性というか尊敬しますし。やっぱりついていきたいと思いますし。そういうふうには。

タカシは、義塾に来てから、虐待していた父や姉への怒りがいつのまにか消えたと語る。

*：（お父さんに）心が感じない？怒りもない？

タカシ：怒りはあったっす。

*：相当たまってるでしょ。ここに。

タカシ：たまっていました。

*：今は？

タカシ：今はないです。

*：いつ抜けた？

タカシ：気が付いたら、抜けちゃったです。

*：どの時点で抜けた？ここに来てから？

タカシ：はい、ここに来てからです。

*：こっちに来てから、よかったことってどんなこと？

タカシ：まあ、うん、いろいろ自分の目標が達成できてるんで。

スタッフの話では、嫌なことがあると家出してしまう癖は、義塾に来てからも一度あったが、数日するとメールがあり、気持ちが落ち着くと帰ってきたという。タカシにとって、義塾が、「逃げ」の場所ではなく、戻ってくるべき「居場所」になっていたに違いない。

ヒロキは、ここに来てから、自分のした行為を冷静に振り返り、我慢する力がついたと語る。そこには先輩の存在も大きいようだ。

ヒロキ：ここきてから、4ヶ月か5ヶ月くらい経ったときっすね。その間に考えよったんすよ。ずーっと。それは、やっぱり、この生活って、自分で、できることはしていくやないですか？

*：みんなが？

ヒロキ：はい。そういう厳しさもあって、自分のためになって、自分の気持ちも強くなったんすよ。

**：気持ちって言うのは？

ヒロキ：その、考え方とか、我慢できるとか。この施設おる塾生っすね。みんなちゃんと頑張りよって、それ見よったら、はい。

*：塾生のみんなのがんばり？

ヒロキ：はい。

**：どういところで頑張ってるなって思

う？塾生見てさ。

ヒロキ：やっぱり仕事とかちゃんとして、お金も自分で稼いで、将来の事もちゃんと考えようし。すごい思いよったっすね。来たときは。

＊：たとえば今までの野球部の関係とか、中3以降のその遊び仲間との関係とかとも、ここの塾生との関係って違う？

ヒロキ：また違うっすね。一緒に暮らしとうき、またその関係とかも、

＊：どう違う？

ヒロキ：どう違うっすか。毎日いっしょにおるき一、ようわからんすけど、やっぱり違うっす。

マイもまた、理事長への信頼は高い。彼女は、理事長が「他のおとなとは違う」存在であることを次のように語っている。

＊：工藤さんじゃないおとなの人のイメージっていうのは。

マイ：いやなんか、一所懸命考えてしてくれとるんやろうなっていうのは、わかるけど、うわべだけっぽく見えるっていうか。

＊：うわべだけっぽく見えるか。なるほど、あっわかる（笑）

マイ：絶対に……なんか、でも現実的にはこうよ、みたいな感じの。わかります？結果的に。わかります？

＊＊：ああー、ああ、ああ。

マイ：みんな、なんて言うんですかね、自分の目線じゃないんですよ、絶対に。

＊＊：おとなの目線？ってこと。

マイ：そうです。おとなの目線っていうか、常識的な考えになってしまうんですよ、どれも。けど工藤さんは……なんつうんですかね、常識的やけど、常識的になっとるけど、理屈っていうか、なんですかね、やっ

ぱり自分の気持ちがわかるんやないっちゃ。たぶん、工藤さんのほうが、自分よりも悪いことしてきとうやないですか。だけえ、その気持ちがわかった上で話してくれるんですよ。だけん、安心するみたいな。

＊＊：親身になってくれても。

マイ：そうです。でも、たどり着くところは、更生するためには、どういうふうな接し方をしたらいいかみたいな感じの、になるやないですか。相談とかも、けっこうしてたんですよ、自分。けっこう信頼、担任の先生は信頼しとったけー。で、よくしてくれよったけー、けどお、どんだけ話してもなんか、例えば、すぐ伝わるって言ったやないですか、工藤さんには。（他のおとなは）めっちゃ時間かかるんですよ、わからない人には、伝えるのに。ほんとに、何ヶ月も何ヶ月もかかって、やっと自分の気持ちが伝わったみたいな。でも、工藤さんは伝えたらすぐ伝わるみたいな。それが大きな違いっていうか。わかりますかね？

6 リテラシーの実態と考察

彼らの学力の獲得は小学校時でいったん停止するが、少年院等の施設に行った子どもは、そこで再教育の機会を得る。しかし、獲得したりテラシーが機能的に生活の中に定着するのは、義塾での体験を通してである。彼らの語りから、機能的リテラシーの構成要素として、①読み書き能力 ②将来設計力 ③自律的な生活の力 ④対人コミュニケーション能力 の4点を抽出することができる。

①読み書き能力

彼らの基礎的な読み書き能力は少年院で学んだ子どものほうが総じて高い。計算能力やワー

プロ等も同様に身につけている。高校卒業認定試験も受けている。

しかし、全員が少年院で学んだ経験があるわけではないので、全体的に学力実態には厳しいものがあり、サポートは必要である。

通信制高校に通う子は、バイトと両立の生活は厳しい。わからないときには、塾内の先輩やボランティアの大学生や教員に助けられながら勉学を続けている。しかし、バイトの時間もさまざままで、義塾では学習支援が定期的に位置づけられているわけではないため、本人の高いモチベーションを維持することが求められる。

そのモチベーションになっているのが、「整備士になりたい」「正社員になりたい」「就職のために高校卒業認定資格が必要」といった各々の強い動機づけである。

②将来設計力

まだ進路を決めかねている子もいるが、ケンスケやタカシのように明確に自分の将来の目標と仕事を決めて「自立」を果たし、義塾から巣立っていく子がいる。また、理事長をはじめ他のスタッフがかつては自分たちと同様の体験をしていることを知っているため、スタッフや先輩の姿がロールモデルとなり、自分の将来像を描く設計力を身につけていく。

そのためには、自律的な生活を送ることの必要性に気づくのだろう。

③自律的な生活の力

ユウキが語るように「(少年院より)こっちのほうが自分との闘いという面ではきつい」。少年院と違い、義塾では、生活は自己管理に任される。自分で働き、無駄遣いせずお金を貯めなければ、自立することはできない。多くの欲求を退けて、自らを律しなければならないが、彼らは少しずつできるようになる。

④対人コミュニケーション能力

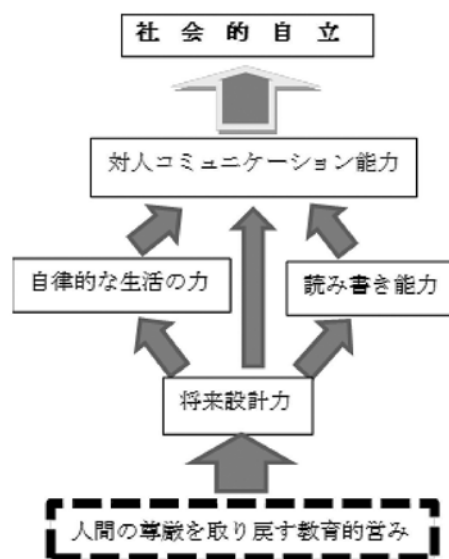
ここでいう対人コミュニケーション能力とは、

トレーニングで身につく対人スキルではない。スキルの根柢にある、人との信頼関係を築く力である。彼らは幼い頃から、人としての尊厳を周囲のおとなたちの都合で奪われてきた。義塾での生活によって自己回復し、他者への信頼感を取り戻し、コミュニケーション能力を育んだといえよう。

たとえば、タカシは溜まっていた澱のような怒りが義塾に来てから、ずっと「抜けていった」と語った。ふらりといなくなっても、必ず義塾に戻ってきたという彼は、心の中で求めている居場所をようやくみつけたのだろう。他の塾生の語りにも共通して、自己回復と他者への信頼が読み取れる。

義塾に来てから、彼らは、顔つきが柔らかくなる。初対面の私たちのインタビューに対して、どれだけ心を拓いて応えてくれたかは、言うに及ばない。

このように、4つのリテラシーの中でも対人コミュニケーション能力は、もっとも重要になると思われる。他のリテラシーとの相互関係は次のようになる。



また、読み書き能力はリテラシーの主要なも

のであっても、単独では機能しないものであることが明らかになった。自律的な生活の力や将来設計力と相互に関連する中で「自立」に必要なリテラシーとして機能していく。

こうして、学校を離脱せざるを得なかった子どもたちが、誰も頼るおとなを持たないなかで、義塾に来てから、自分を見守り、何をしたいかを見つけるまで待つおとなと出会うことにより、自己回復の道をたどる。スタッフや先輩の姿がロールモデルとなり、将来像を描く設計力を身に着けていく。そのためには、「逃げ」「遊び」の生活スタイルと決別し、自律的な生活を送ることが基本となる。自ら、学び、働き始めた彼らは、小さな成功体験を積み重ね、自己信頼感を取り戻し、コミュニケーション能力を身につけていく。

7 リテラシー獲得のための教育的営み

では、こうしたリテラシーを塾生たちが獲得するための、人間の尊厳を取り戻す教育的営みとは、どのようなものであるか。

私たちが訪れる義塾は、常に開放的で、リビングでゲームをしたり談笑している塾生の姿が見られた。決められた日課は、一時間程度の畑仕事と、日記や写経、食事の後片付けと部屋の掃除の時間がある程度だ。対人スキルや就労支援、学習支援の時間が設定されているわけでもない。そもそもカリキュラムが存在しない。彼らの語りにもあるように、「働くこと」や「勉強」を強要されることもない。起床や就寝時刻も一律に定められているわけではない。施設そのものも普通の住宅家屋で、高い塀も厳しい管理システムもなく、出入り自由である。

しかし、一見、何も支援していないかのように見える自由度の高さの中で、塾生たちは、自ら働き、学び始める。このような変容の原動力

には、スタッフの目的意識的な関わり方がある。いわゆる「学習支援」や「就労支援」とは違うアプローチを採る義塾の方法を、理事長の工藤や支援スタッフの語りの中から、読み取っていききたい。

以下、その特徴的なものを5点挙げる。

①自己選択・自己決定を待ち、見守る

義塾に来た当初は、特に何かすることを与えらるわけではない。何をすることもなく、塾生たちはただただ一日を過ごす。そういう状態が2週間から長くて3ヶ月続く。ボランティアとして関わるスタッフの学校教員（エンドウさん）は次のように語る。

＊＊：その3ヶ月間ってここで何するんですか？

エンドウさん：別になにもしてないですよ。なんか、ただ部屋にいて。

＊＊：工藤さんと話したり？

エンドウさん：まあ工藤とも話したり。他の友だちと話したり、スタッフと話したり。

＊：基本的に受け入れてもらってるってみたいな。

エンドウさん：そうですね、受け入れてもらってるっていうのは絶対あると思うんです。自分たちのためにしてくれてる。だけ、工藤は、書類だけみて、受け入れてるわけじゃなくて、実際絶対少年院に会いにいくし、連れてくるときは自分で行くし。

昼間はたいていいる事務及び賄を担当するスタッフのフクモトさんに聞いてみた。

＊：そのときって畑仕事以外には大抵部屋にいる？

フクモトさん：そうですね。洗濯したり、ゲー

ム大会があったり、本読んだり。あと、DVDを借りてきてみたりとか。ですね。あとはもう、そうですね。大概部屋にいるか、リビングでわいわい何かやってるか。

*：じゃあ、どっちかといえば、そばで見守っている感じなんですね。

フクモトさん：そうですね。まあ、何かを向こうから言ってこれば、ここのバイトどう思います？とか仕事でこんなあったんですよ、とか、一時帰宅で帰ったとき親とこんなあったんですよ、とか、そういう言うてくれば、たとえば、昨日面接どうやった？とか、そういうくらいの声掛けはするんですけど。

子どもたちは、その長い時間の中で自分と向き合い、やがて何かをしたくなる。スタッフは、そのタイミングを待っている。やがて、子どもたちは、自ら働くことや勉強することを自己選択、自己決定する。このタイミングについて、理事長は次のように語る。

理事長：そうです。仕事をみんなしてないんですよ。でも、それを言うてくるってことは、自主的にやりたいってこと。

*：そうかそうか。

理事長：でも、そこをじらすんです、まだ。今させてもいいんやけど、もっとしたいし、たいっていうふうに思わせんといけんし、それを周りが給料もらったり、モノを買うのをうらやましく見る子もいますから、それをうまいことね。

*：したいっていうことも、成長の一つ。

理事長：もちろんです。自分からやりたいって言うてきてるから。だからそのタイミングですよ。すぐさせるじゃなくて、がまんがまんさせて、じらして。

*：その方が続いたり…

理事長：そうですそうです。その度合いが強いほどですね。全てやっぱ人間は一緒です。

②ロールモデルの存在—スタッフや先輩、地域の人との出会い

理事長が塾生たちにとって「今まで出会ったことのない信頼できるおとな」であり、自立するために頑張っている先輩の存在も影響を与えていることは、語りから読み取れた。こうした先輩との関わりは、意識的に行われている。

理事長：ほとんどみんな先輩が教えます。最初は自分たち教えてましたけど、分からん部分はきて、全部先輩たちが教えたりということはします。ちゃんと世話役をつけてるんですよ。

*：世話役？

理事長：一人きたら、お前がこの子担当、一生懸命教えてやれっとかって。

*：それは決めるわけですか？

理事長：これは一番最初からそうしてますから、その流れでみんな動いてきて、お前が先輩からしてきてもらったことをせーって。そしたら、みんな優しく教えてもらとるから、それをやっぱして。やられてやなことはすんなって。

また、スタッフだけでなく、近辺の大学生のボランティア、学校の先生、地域の人たち、さまざまなおとなとの出会いを多く作ることによって、ロールモデルを提供している。

③記憶の上書き作用による、おとなへの信頼回復

ここに来る子どもたちは、多かれ少なかれおとなに対する不信感を持っている。その結果、子どもたちには人との関係を作る力が育っていないと、ミユキさん（理事長の妻）は言う。学

力よりも何よりも「人との関係を作ることを一番大切にしてほしい」と語る。「悪い誘いに対して断らなければならないところを断り切れず」「自分がやばくなったら平気で人を裏切る、うそをつく等を繰り返す」と、そういう方法でしか人と接することができない、自分を守ることしかできない子どもたちにとって、人との信頼関係を回復させることがコミュニケーション能力の源になる。

＊＊：一番その子たちが育ちきれてないと言
うか奪われているものは何を一番感じます
か。

ミュキさん：私が思うにはやっぱり心です
ね。人に対して平気で裏切る、平気で嘘を
つく。それをまた繰り返す。正直学力とか
もあればあった方がいいとは思うんですけ
れども、その学力なくても正社員なれる子
もいるからですね、そこは私、大きくは思っ
てないんです。やっぱり社会に出て何が大
事かと言ったら人と人とのつながりだと思
うんですよね。

＊：やっぱりその子らの家庭環境も含め学校
経験から来てるっていうか。

ミュキさん：はい。

＊：それはやっぱりおとなとの関係ですか。

ミュキさん：はい。

＊：おとなとか先生とか。

ミュキさん：まず親、そして先生。

先生によるマイナスの体験をプラスに塗り替
えるために記憶の上書きが必要だと、理事長は
言う。

理事長：この子たちは学校の先生に対しても
あまりいい印象を持っていないんです。こ
のままおとなになって自分の子どもができ

ても学校の先生を信用できないと思う。そ
れは負の連鎖なんです。だから、おまえた
ちの会った先生は、本物じゃないんだ。
本物の先生とはこういう先生なんだと、こ
こでは出会い直しをさせているんですよ。

義塾に関わるエンドウさんをはじめ何人かの
先生たちとの出会いによって、子どもたちは「こ
んな先生もいるんだ」「信頼できるおとなもい
るんだ」と感じるようになる。

学校の先生だけではない。理事長は、自分達
スタッフが子どもたちにとって家族としての役
割だと意識している。

理事長：〇〇にはお父さんが入ってない
けー、おれがお父さんにならないけん
にやっという思いですよ。で、親父やっ
たらどうしてほしいかってなったら、やっ
ぱりしっかり話を聞いてやったりとか、そ
の男像を植え付けないといけんとか。〇
〇の場合は親父分よりも兄貴分ですよ。ね。
年代が近いけー、兄貴兄貴って思える人
にならにゃいけんって思うし。

家族役割について、ミュキさん、フクモト
さん、エンドウさんは次のように語る。

ミュキさん：そうですね。やっぱ一番はその
工藤が言ってる、こんな人がいてくれたら
なって思ってた人に今自分はなりたいの
で。今も、ずっと昔からも言ってるんです
ね。だから逆にその子たちの気持ちが一番
わかるし、こういうときはこうしてほしい
とか自分があの時してもらいたかったこと
を今してるっていうふうに言ってたからで
すね。だから自分が小さい時に受けたつら
い思いは自分がこうなる為の準備運動みた

いな感じって（工藤は）言っていましたね。

＊＊：へえ。

ミユキさん：あの経験がないと今の自分がないし。

＊＊：フクモトさん自身のここでの役割ってどういうふうなもんだと自分で感じてますか？

フクモトさん：そうですね。もう別に、いるのが塾生にとって当たり前で、まあ家と言えば、お母さんみたいな感じでいれば、帰ってきたときに「ただいま」とか、仕事いくときに「いってきます」とか、まあそういう感じで、なんか困った事があれば、言ってきたら大丈夫って言う雰囲気は出したいなと思ってますけど。

＊：全般的にエンドウ先生が見てられて、まあこんなことつけさせたいとか、言っていたくことってできますかね？

エンドウさん：いやいや、当たり前の生活がまずあるかなと思います。三度のごはんと、ちゃんと同じ布団で寝て、朝起きてっていう。

＊：それを裏返すとそれをしてこなかった。

エンドウさん：そうですね。きちんと当たり前、夜寝てっていうか、当たり前の生活と三度のごはんとあいさつとか。まあ家族みたいな関係ってことなんですけど。まあこれは7割、8割かな。

容易におとなへの信用を取り戻せない子もいる。そういう子どもに対して、どのように接するのか、ミユキさんに尋ねた。

＊：特に気遣ってることってありますか？

ミユキさん：うーん、やっぱり一番は、人は信

用できるんだっていう……おとなの信用を取り戻すっていうところが、やっぱり一番おっきいかなと思いますね。

＊：どうやったら、取り戻せるって……

ミユキさん：うーん、やっぱり、私もこうやったらとかはないんですけど、一番は、その、ちゃんとあなたのことを心配してるんよって、あなたの帰りを待ってるんよっていう、そういう心に、なんて言うんですかね、ほんとにこの人は裏切らないんだな、私のことを裏切らないんだなって思えるように……っていうのはありますね。だから、何回嘘つかれても、いやそれでも私は信じるとかですね。

＊：でも、ときにはもう、全然心を開かない子とか、そういう子に対して、こんだけやってるのに、なんでわかってくれないの？っていう、イライラ感っていうのはないんですか？

ミユキさん：それはないですね。最初から、求めてないから。勝手にこっちがやってることだからですね。別にその子が頼んで、そうやってしてくれって言ってることじゃないからですね。

④規律の個別化——一人一人に合わせた規律のネジの調整

義塾では、いくつかの「決まり」はあるが、極めて少なく、ごく常識的なことだけである。他律的でない分、自分に必要な規律は自分で律しなければならない。それを少しずつできるようにするために、義塾では、一人一人に合わせて規律のネジを調整するという教育手法により、効果を上げている。たとえば、お金の管理の仕方やケータイの使い方、遊びの行き先や時間など、一人一人の状況に合わせて許容度を理事長が調整している。

＊＊：遊びに行くのも自由ですか？

エンドウさん：えっと、言ってからですね。

＊＊：どこ行くとか、何時に帰るとか、その約束さえ決まれば別に、出てもOK？

エンドウさん：まあそうですね。まあ行くなとかいうのは、工藤が止めるか止めないか。

＊＊：相手によっても違う？

エンドウさん：そうですね、あれが全部考えて。

＊＊：いっさい禁止ということではない？

エンドウさん：そうですね。

自分を律する力がつけば、逆に規律はしだいに緩められ、他者からの信頼を勝ち得るという結果になり、自立の自信がつく。

⑤スモールステップによる成功体験の積み重ね

塾生たちが自力でしたいことをみつけて行動に移したら、必ず肯定的に評価するというのが、義塾の大きな指導方針である。どんな小さな変化も見逃さないでほめる。しかし、ただ待つだけでなく、時には、さりげなく行動を促すこともする。

理事長：その、性格とか見よったら、この子、接客業がいいとか、トラックの運転手がむいちよるとか、で、整備士が向いてるとかあるから。そこにはある程度、枠をつくって。そしたら、それいいですね～とかいって、ノッてきたりします。

＊：どういうタイミングで、話すんですか？ご飯の時間だったりとか、ここに呼ぶとか。

理事長：あ、ここに呼んだりもしますし、話をするときはタイミングがありますからね。だけど、一番最初は、じゃけん、目標持たさんといけんじゃないですか。

＊：それは比較的、この義塾来てから早い時

期に、そういう話を…

理事長：できる子はします。できない子は、正直、塾のなかのことをやってもらわないといけないから。段階がありますから。

＊：それぞれの塾生に対しての関わり方っていうのは、意識して使い分けたりしてるんですか？

理事長：します。全員には絶対同じには扱えませんね。やっぱりその子の生き方だったり、その子に何が足りないのかというのを前提に。

自らも塾生と同様の体験をしてきたスタッフのヨシダさんは、塾生にとって兄貴分としての存在であるが、決して権威的ではなく、常に優しく温かいまなざしで塾生たちに接している。同じ目線を大切にしていると述べ、一人一人の良さに着目している。

＊＊：今、塾生に対して、働きかけるときに一番気をつけてることとかってありますか？

ヨシダさん：うーん、気をつけてる事。やっぱりもう、歳が上だけど、上から言うだけやないで、やっぱり同じ目線でいかなってところもあるし、でもいいところを伸ばしてやっていう。いろんな問題抱えちゃうけど、やっぱり悪いところばっか指摘するんやないで、結構、個人個人で良いところもってるんですよね。細かいことに気がつくとか、そういうところを伸ばしてやった方がやっぱりいろんな面で将来的に伸びるかなって思うんですよね。

成功体験を認め、ほめることは、単に指導のスキルとしてではなく、子どもたちの存在をあるがまま肯定することから出発している。そして、スタッフの喜びは、子どもたちの成長だと

語る。

ヨシダさん：うれしいことは、やっぱり、あの、来たばかりの頃と、それから、半年なり一年なりで出ていくですね。そのときはもう、やっぱり別人になっちゃうんですね。もう最初は、手、焼くやろうなという感じやけど、変わる様が見えるんですね。毎日いっしょにいたらですね。よくなってくる。一気に成長したとかですね。

＊：その変わるっていうのは、なんで変わるっていうふうに、ヨシダさんから見てて思います？その子たちが変わるの、その、なぜ？

ヨシダさん：やっぱりみんなで生活する事にも意味があると思うし、アルバイトしたり。で、心の欠けちょ一部分がですね、いくらか埋まってくるのが分かるんですね。

＊：その欠けているものっていうのは、なんか、ここにくる塾生一人一人違うんでしょうか？だいたい共通するものがあるんでしょうか？

ヨシダさん：いえ、それは人それぞれ違うんですけど。

＊：それがここにいてると満たされていく？

ヨシダさん：そうですね、やっぱり少しずつ成長したりですね、自分で気付いたり。

＊：やっぱ人との関係ですかね？

ヨシダさん：そうですね。

8 エンパワメント・アプローチとして

以上、見てきたように、方法論として5点が挙げられた。目的意識的な教育的営みと言える。

千葉（2004）は、識字教育のアプローチとして、近年、「人間的エンパワメントアプローチが多くみられる」と述べている。

エンパワメントとは、「スティグマ化された人々の否定的評価によるパワーレス状態を減らすことができるように援助する過程である」（Solomon1976）と定義されている。

森田（2004）によれば、おとなが「子どもの気持ちを聞き、受け止め、行動の選択肢を一緒に探す」ことによって、「問題を解決することは可能だとの自信を育てる」とする。そのためには、子どもを「おとなが指導し教育しはじめて力をつける存在」と捉えるのではなく、「感じる力、人とつながろうとする力、自己治癒力、問題解決力などの力を内在させている存在」と捉える子ども観が重要であり、「子どもたちは本来持っている力を出そうとすることができるような環境におとながなること、それが子どものエンパワメント」とする。

義塾における支援は、このような方法論と価値観のフレームワークで捉えることができる。更生保護施設として、貴重なエンパワメントアプローチの試みと言える。

引用・参考文献

- 岩田美香（2008）「少年非行からみた子どもの貧困と学校」浅井春夫・松本一郎・湯澤直美編『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店。
- 岩槻知也（2006）「批判的リテラシー研究の動向とその意義」『京都女子大学発達教育学紀要』第2号、1-10頁。
- 森田ゆり（2004）『新・子どもの虐待』岩波書店。

ソロモン（Solomon, B.）（1976）『黒人のエンパワメント（Black Empowerment）』。

千葉果弘監修（2004）『国際教育協力を志す人のために：平和・共生の構築へ』学文社。